

「道草を食う」

静岡県 積雲院住職 すずき がじゅ 鈴木雅樹

ボランティアで、小学1年生の下校の付き添いをした時のことです。学校を出てしばらく歩いていると、1人の女の子が、

「わあ、このお花きれい！」

と言って、道端に咲いている花を摘み始めました。さらに、少し後ろでは男の子が地面にしゃがんで、

「この石おもしろい形をしているー」

と言いながら、石を拾って遊んでいました。

「みんな、ダメだよ。道草食っていたら、帰りが遅くなって、お家の人心配するでしょ」

「はい！」

と、返事はいいものの、舌の根の乾かぬ内に、

「あっ！川に大きなおさかなさんがいるよ」

「えっ！どれどれ？ほんとうだ。おっきいね〜」

と数人の子ども達が立ち止まって川を見てはしゃぎ始めました・・・。

「やれやれ」と思いながらも、目をキラキラ輝かせながら、今この瞬間、見て聞いて感じているもの全てが新鮮で、宝物のように大切にできる子ども達が、うらやましく思えました。と同時に、子どもたちと同じように見て聞いて感じているはずなのに、それを当たり前のこととして、見向きもしなかった自分が寂しくも思えました。

人生の目的地、つまり終着点が生だとするならば、人生における道草とは何でしょう。人生における道草とは、今ここで自分に起きている一瞬一瞬の出来事であり、道草を食うとは、その一瞬一瞬を大切にすることではないでしょうか。

繰り返す日常が、当たり前のものでなく、実は儂く大切なものだということを、私たちは様々な災害から嫌というほど思い知らされました。たくさん道草を食いながら、人生を歩んでいきたいものです。